

## 猫車⑥

(1) 「すまん、化物とまちがえてお前の姉さんを谷底へ落してしまったが…ゆるしてくれ。それにお千代どのとやはらは、すがたが見えないところを見ると生きているかもしれない」と、秋月にいわれて

(2) 「小父さん仕方がないよ。小父さんは悪い人ではないもの。けれど姉ちゃんがいないと、オレひとりですノサマを討ちとらなくてはならないんだ」「えッ、どうして…ふーむ」わけをきいた秋月ハヤトは

(3) 「それなら私が助太刀して、お父さんのカタキのトノサマを討ちとってやろう。それにはお前は私について、剣術をならえ」といつて、孝七とふたりで山へこもることになりました。丸太小屋を作って

(4) それからは孝七に剣術を仕込みます。「孝七、父のカタキのトノサマだと思って打ちこんでこい」「おーッ」剣術がおわれば

(5) ふたりは楽しい食事をします。「学問もおしえてやる。お前はなかなか手すじがいいから、きつとすばらしい剣術つかいになるぞ」こうして孝七が修行しているころ、

(6) 孝七の父を斬ったトノサマの城下町では、夜な夜なあやしいことがおきていました。今夜もふたりの侍が通りかかると、

(7) 「おッ、柳の木の下で娘が泣いているぞ」「はてな、川へでもとびこんで死ぬのではないかな。とにかくとめてやろう」

(8) 「おいおい娘さん、何を泣いているね」「おい、これ、へんじをせい。これ、わしらはシンセツじゃ。かあいらしいカオを見せてごらん」「は、はい」

(9) 「わッ、デヤー」「ガーッ、ニャオーン」「わーッ化猫だ」侍はおどろきました。怪猫はたちまちひとりにおそいかかって

(10) 「ニャオーン、ガーッ」「あーッ、ウーン」「オノレ化猫、かくごせよ」と、のこる一人は刀をぬいて向っていきますが、さて…